



音楽大学受験生のために

初見の勉強の仕方

田村 宏公開レッスンより誌上紹介 No.3

田村 次に初見のことについてお話いたします。他の私立音楽大学では初見の試験があるか知りませんが、私の関係している芸大では、ピアノの専攻学生に初見の試験もやっております。

先だってヤマハ音楽振興会から私のところに送ってきてくれた本の中で、小林仁さんが初見についてわかりやすく書いておられますので、それを読みながら、初見についてお話を進めてまいりましょう。これは総合音楽講座の(3)「初見演奏及び移調奏」という本です。これに私の意見を少し補足してお話致します。

お話の前に、これを弾いて頂きましょう。

(注 先生が御用意なされた初見用の楽譜を、受講生の一人に渡される)

40秒位したら「はい」と云いますから弾き始めてください。

(注 受講生弾く)

田村 では、この曲は本当はどんな曲か一度弾いて見ます。

まず、曲首に Allegro giocoso と書いてあり、四分の四拍子の曲です。しかし、よく見ると二拍手の感じの曲だということがわかります。

(注 先生模範演奏)

田村 まあ、こう弾ければ満足でしょう。

この本にこう書いてあります。

「まず曲全体を見渡し、そして調号、拍子、テンポ、楽想を正確にとらえ」

この曲でいいますと、シャープが四つついていますが、E dur (ホ長調)か、cis moll (嬰ハ短調)なわけですから、そして途中転調していないかよく見ます。

ナチュラルやシャープなど臨時記号がついていたら、何調に転調しているのかなと良く見ることです。

それから、拍子記号、曲の途中でも拍子が変わっていることがよくありますから、よく見ることです。この曲では拍子の変化はありません。

テンポ、この曲では Allegro だけをよく見ればよいのです。楽想を正確にとらえるということは漠然としています。この曲では Gavotte です。

次に「特徴的なリズムの有無を確かめ」例えば、シンコペーションであるとか、三連符であるとか、右手が三連符で左手の2音とかみ合わせるとか、ちょっとむずかしいリズムの曲だったりすることがあります。

次に「曲の途中にでてくるもっとも音価の短い音符を

どの位のテンポで弾けるかを考える」これが大事なことなのです。これをよく考えないと、途中で指がまわらなくなるなんていう事態が起こってくるのです。

ですから、一番短い音価の音符をまず調べ、ざあと見て、例えば三十二分音符などでできたら気をつけなければいけません。その前にフェルマータか何かついていて、カデンツァ風の所にでてくるならばまだよいのですが、普通のきざみで十六分音符や三十二分音符などという細かい音がでてきたら、そこで弾ける可能なテンポを見当つけて弾き始めることです。

この細かい音符を基準にして曲全体のテンポを割り出さないと、あとでとんだことになるということがあるわけですから、この点特に気をつけてください。

次に「弾き初めたら止まらないこと。」

これは当然のことです。音楽が止まったら大変、心臓が止まるのと同じことです。

それから「初見をなめらかに弾くコツは、常に少しでも先を見て弾く」ということです。これは常識ですね。

ですから、同じような音型がきたら、それが何回と読んで、ずっと先まで読んでしまうことです。

「早い曲では常に2・3小節先を、ゆっくりな曲でも、2・3拍先をいつも見て弾くようにするとよい。」その通りです。それから、「特にメロディと左手のバスは、注意深く確実に正しい音で弾くように気をつける。」極端な話が、どうしてもこうにも、どうしても譜を読み切れなくなった場合、メロディだけをきれいに弾き、下はその調整の音を適当に判断して弾くというようなことをするのは、

しかし、こういうような訓練ばかりがよくできていて、メロディだけをきれいに弾き、最後の終止の和音だけを、きちんと弾くなんていう人がいますが、これはあまり印象のよいものではありません。(会場笑い)

次に「フレーズ、ダイナミクスにも注意すること。たとえ初見でもできるだけ音楽的な美しい演奏をするよう心構えること」です。

初見といっても、タマを拾うことだけではないのです。タマを拾うなんていうのは、その一部であって、新しい楽譜を見たら、瞬間に音楽的内容を捕え、音楽的に弾くということが初見の理想です。

まちががなくタマを拾い、つかえなかったなどといって御機嫌にならないことです。

この本には、大体以上のようなことが書いてあります

が、さらに補足するならば、フェルマータについてです。

入学試験の初見曲には、必ずといってよい位、rit やフェルマータがあります。これはもっけの幸いなことで、フェルマータがでてきたらこれ以上のぼしたら間がぬけてしまうと思われる寸前までのぼすことです。そしてその間に、ずっと先まで譜を読んでしまうことです。初見のきかない人ほどあわててしまって、このフェルマータを見逃してしまい勝ちなのです。rit も同じ要領です。

それから、オクターブ記号を見落し勝ちです。オクターブ記号があるのに、オクターブ上を弾かなかったり、オクターブ記号が終っているのに、まだ上を弾いていたり、この記号は見落ししやすいのでよく気をつけましょう。

それから、Allegro とか Allegretto などという速度記号についてです。初見曲においては、普通、Presto などという曲は出題されないと考えてよいでしょう。Moderato とか Andante 早くて、Allegro 位の曲が出るのではないかと思います。

そこでテンポの設定ですが、Allegro とかいてあったら、これ以上おそくひいたら Allegro の感じでなくなるギリギリ一杯のおそめのテンポを設定するのが賢明の策です。

よく、みかけるのですが、正確にひけば、いくらおそくひいてもよい、と思いこんでいる人がいますが、それは誤った考え方です。例えば、リストのエチュードでもゆっくり弾けば、バイエルと同じことになってしまうでしょう。

テンポについては、ともかく、指定されたテンポ表示の遅い限界をとることで。

それからもう一つ大事なことは、テンポをとる規準にする音符のことで。先ほど弾いたような曲では、八分音符・四分音符・二分音符と、それほど音符の種類がないので、そう心配はいりませんが、一杯いろいろな種類の音符がでてくる曲では、曲の拍子とは別に自分がテンポをとるための基準とする音符を、きちっと定めておくことです。

これをきめておかないと、短い音符を二倍の長さにとったり、長い音符を半分の長さしかのぼさなかったり、というようなことが起こってくるのがしばしばあります。

例えば、自分で四分音符を基準にしたのであれば、二分音符は2倍、八分音符は二分の一。これはあたり前のことです。(会場大笑い) この至極くあたりまえなことが、実際の試験になると、あたりまえでなくなることがよくあります。

以上のようなことに気をつけて、初見曲に当たってください。

では、私が弾いてどういう所に特に注意しなければならぬか、実際をお示ししましょう。

まずこういう事をやったら点を引かれてしまいます。(2度引きをされる)

それから、これです。40秒見せられているのですから(調号を見落して、シャープのついている音を白鍵で弾いてしまう。)

次にこれはいけません。

(転調している所で、調子感を表わす音をまちがえて弾かれたり、rit とあるところを、rit せず初めのテンポ通り弾く)

以上のようなことは、減点の要因になります。

司会 初見の試験曲はだいたいにおいて作曲科の先生がお作りになるのですか。

田村 誰が作るか知りません。

司会 何小節位の曲が出題されるのでしょうか。

田村 そうですね、だいたいいままでの所では、25・6小節位の長さの曲でしょうか。

司会 そして曲の途中で転調があって、手の交叉のある曲がでるのですか。

田村 いえ、そういったことに関しては、あるか、ないか、出てみなければ分かりません。

では、今迄の注意事項に気をつけていただいて、もう一曲弾いていただきますよ。

(受講生弾く)

田村 立ちどまってはいけません。この曲はこういう曲なんですよ。聴譲していらっしゃる方々に、楽譜をコピーしてお見せすればよいのですが。

(田村先生 模範演奏)

田村 私は、自分でいうのもおかしな話ですが、だいたい初見は割合にきく方です。

それでは、どうして初見がきくようになったかと申しますと、戦争中、管弦楽曲のレコードに、ピアノスコアがついていまして、それを暇にまかせて集めては、毎日のように弾いていたので、自然身についてしまったのです。

それから、学生時代オーケストラの中で、ファゴットを吹いていたのですが、ファゴットは単音ですが、音を読み違えたら大変ですから、オケの練習のとき、新しい譜面を必死になって読んでいたのが役に立ったのかも知れません。

初見は、一つの慣れですから、皆さん毎日10分でも5分でも新しい譜面に接して弾いてごらんください。そうすればすぐにでも、初見力がつきますよ。

さて、先ほども、テンポのことについて御注意しましたが、ここで、もうひとつの例をお話ししましょう。

私の生徒で、初見がとてもよくきく子がいますね、入学試験の時、腕がなっていたんでしょうね。Allegro の曲だったかな、その曲をもつごテンポで弾き初めたのです。そうしたら、途中でタマを拾いきれなくなって、いわゆる、サバ弾きやってしまったのです。

試験後、私の家で、その楽譜をみせて、もう一度ひかせてみましたが、勿論2度目ですから初見ではありませんが……。今度は、程よいテンポで完璧にひくのです。ほんのちょっとテンポをゆっくりしただけで、ゆとりがこんなに違ってくるのです。

ゆとりを持って弾くということが大切です。

それから、もう一つ悪い例に、ゆっくりすぎたテンポで弾くということ。先ほどもいいましたように、ショパンのエチュードでも、リストの曲でもゆっくりタマを一つ一つ拾って弾いたのでは、初見の難かしさ、という意味ではバイエルと同じになってしまいます。

入学試験の時にも、テンポの指示を無視して一つ一つタマを拾ってゆっくりと弾く人がいます。本人はミスもなく完璧に弾いたと思っているのかもしれませんが、これでは点になりません。

司会 田村先生は、オーケストラでファゴットを吹いたり、アンサンブルをなされたり、多くの音楽に接していらっしゃることは、昨年の9月号で紹介されておりますので、御覧ください。

結局、初見の勉強といっても、数多くの音楽体験をするということでしょうね。